

2011年末、テレビでは3.11の被災地と他の地域  
の間に徐々に現れ始めた温度差を埋め、記憶の風  
化を食い止めようと、震災関連の映像が繰り返し流  
れていました。

あまりに多くの命が奪われ、長い時間をかけて築  
き上げてきた暮らしの基盤が跡形なく失われたあ  
の日から早10ヵ月。私達日本人はこの経験から何  
を学び、いかにして明日への希望を見出すことが  
できるか？ 日々この問いに向き合うことは、私達に課  
された重く大切な宿題だと思います。そこで新年第  
一回目は番外編として、去年の師走に訪れた宮城県  
の南三陸町と気仙沼の切り紙細工をめぐる見聞記  
をお届けします。

### 🍡 「お正月さま」、"仮設" に来たる

12月18日、気仙沼の琴平神社はお正月準備の真っ  
最中。種類ごとに箱詰めされたたくさんの「お正月さま」  
や「きりこ」が、氏子さんに配られるのを待っていた。

「お正月さま」とは宮城県一帯でまつられる、大年神、  
五穀の神、恵比寿や釜神様等の御神像のこと。「きりこ」  
は縁起物をかたどった切り紙の正月飾りで、半分に折っ  
た紙に供物や吉祥図柄を切り出す「切り透かし」、複雑  
な切れ込みを入れた立体的なもの(「網型」等と呼ばれ  
る)、幣束など多彩な形式がある。

この地域の昔ながらの家屋には二間もある立派な神  
棚があり、神社からのお礼やお正月飾りの他にも、注連  
縄しめなわや「ほしの玉」と呼ばれる縁起物の絵が、大漁や豊作  
を願って賑やかに飾られる。宮城の伝承切り紙の見事  
さは以前から聞きかじっていたが、現地を訪れる以前、  
震災後初めて迎えるお正月を前に「あんな手間がかか

るもの、現地ではそれど  
ころではないのではない  
か…」と、私は勝手に想像  
していた。

気仙沼湾の入り口に突  
き出た岬、岩井崎に立つ  
琴平神社は、創建1635  
年の古い神社だ。3月11  
日、神社の周囲の集落が  
大津波に呑まれたにもか  
かわらず、水は神社の境  
内へ上がってお宮の前で  
止まったという。震災直  
後しばらくは周囲の住民  
たちが社務所に避難していたそうだ。

震災前まで400軒あった氏子さんのうち300軒が  
津波で流され、今は残った60軒ほど以外はほうぼうの  
仮設住宅や他所に移っている。今年は宮城県神社庁が  
仮設住宅用に壁掛け型の小型神棚や通常の半分サイズ  
の御神像を用意し、各神社の神職さん達が仮設住宅を  
まわって住人達に無料頒布しているとのこと、今年も  
きちんとお正月の神様の抛り代が用意されたと聞いて、  
正直驚いた。

宮司の清原正臣さんによれば、切り紙の「お飾り」の  
風習がいつ頃はいなくなったかは不明だが、昔は紙が貴重  
だったので昭和20～30年頃までは各家が障子紙を神  
社に持参してその場で必要な分を宮司さんに切ってもら  
っていた。今は琴平神社では7種類の「切り透かし」と  
1種類の「網型」、各種の御幣束をあらかじめ用意する。

「切り透かし」(10枚重ねで切る)は切るのに約50分、  
立体的な網型はなんと1枚に2時間もかかるため  
1日に1、2枚、多くて3枚作るのが限度。「ほぼ  
毎晩ね、日課のようですね。昔、親父のときは氏子  
も250軒ほどだったし、網型は30人ほどの役員  
さんだけにお歳暮代わりに切って配っていたん  
です。」今は約500軒分を宮司さん一人で切るため、  
お正月が明けるとすぐに来年の準備を始め、一年  
かけてなんとか切り終わっていたそうだ。

3.11以降、琴平神社も当然、切り紙どころでは  
なかった。「お盆過ぎになって、やっぱり今年も切



琴平神社では、愛嬌たっぷりの  
狛犬がお出迎え



神棚の例(宮城の正月飾り刊行会編『祈りのかたち・宮城の正月飾り』より)

ろうと思ったんです。目標の200軒分には届きませんが、なんとか100軒分を間に合わせました。」仮設住宅での頒布を終えてちょうど戻って来られたという息子さんの、凛々しいご装束姿が印象的だった。

周囲の家が壊滅し、砕けた墓石が無残に散在する海辺にあって、ぼつんと不思議なくらい変わりなく残る琴平神社。神社の神様と宮司さん一家はこの場所で、近い将来、きっと帰ってくるだろう氏子さんたちを待ちながら、その暮らしを見守っている。神社が大きな木の根のように見えた。

### ✂️「きりこ通りプロジェクト」

わたしが三陸の「きりこ」に興味をもったきっかけは、2010年のアートプロジェクト「生きる博覧会」で行われた「きりこ通りプロジェクト」だった。

外から来た若いお嫁さんたちを中心とする南三陸町在住の女性たち有志が、志津川駅から海へと続く沿道の家々を一軒一軒訪ね歩き、大切な思い出、宝物、歴史などを聞き取りして、それを元にその家々オリジナルの「きりこ」を作成する活動だ。

夏の青空の下、沿道に吊るされた500枚ものきりこが街の人々や観光客の目を楽しませた。だが震災で、この地域の情緒ある佇まいは一変、一面の瓦礫と化す。プロジェクト参加者の多くも被災し、住む家を失ったという。

昨年6月に東京でプロジェクトの中心メンバーの方々とお会いした時、「南三陸の歴史を再発見し、人々の人生に共感しながら、作業をすすめた半年前のあの活



「ケーキとお酒とバス停の不思議な柄はお菓子屋の雄新堂さんのきりこ。隣の酒屋で一杯飲んだお父さんがバスを待つ間家族のためにケーキのおみやげを買いやすいように、開店以来いくつかのケーキを200円のまま値上げしていないのだそうです。阿部英恵作。」

(写真・文章：「生きる博覧会」ウェブサイトより)

動が、まさかこれほど貴重な町の記憶の記録になろうとは思ってもよらなかった」と涙ながらに話された。2011年夏のお盆のイベントでは同プロジェクトの音頭で、仮設役場横の広場に全国から寄せられた何百枚もの「きりこ」を並べた「きりこ回廊」が作られた。《南三陸の海に思いを届けよう》と題した追悼集会も行われ、ネット中継された。きらきらと波が光る、あまりにも美しく穏やかな夏の海。「あの日から初めてこんなに海に近づいた」と言いながら、いつまでも海をながめる女性たちの後ろ姿が今も鮮明に思い出される。

### ✂️きりこ揺れ、「神様、ああ、来たのかな」

「自分たちは昭和35年のチリ地震津波のあとに生れた世代で、津波がきたら高い所に逃げろとは聞いていましたが、ここに50年周期くらいで大津波がきていたとは全然知らなかった。チリ津波の時は自宅まで津波は届かず近所の60人ほどの避難者を受け入れたそうで、だから義母さんは今回の津波でも“ここは大丈夫だから”って動こうとしなかった。妻が無理やり一緒に逃げて助かったんですけど。」南三陸町の志津川地区の高台に建つ上山八幡宮。神職の工藤庄悦さん一家はあの日、雪降る中、神社の上の山を越えて近くの小学校に避難し、一命をつないだ。眼下の自宅は津波に飲み込まれた。被災後は数か所の避難所を転々としたのち、今は隣市の仮設住宅に住みながら、毎日この神社まで通っている。宮司である義父の祐允すけよしさんは、「4月に二次避難所に移る時、“神社と俺たちを置いていくのか”と言われてねえ。秋祭りには帰ってくると心に誓っての苦渋の決断でした」と話す。

上山八幡宮の「きりこ」は、4種類の「切り透かし」(三方さんぽうにのった御神酒、餅、宝袋等の供物の図案)と、「恵比寿の幣」と呼ばれる網から鯛や扇が垂れ下がる立体的な切り紙細工を主とする。「わたしのところのお飾りは、県内で一番簡単だと思いますよ。シンプル イズ ビューティフルですね」と宮司の祐允さんは笑うが、私はこの神社のきりこはおおらかなラインがなんとも愛らしく、洗練度ピカイチの図案だと思っている。

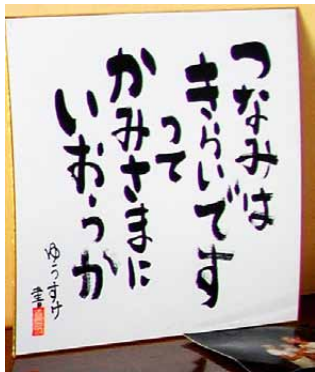
切り透かしには厚紙の型紙があるが、恵比寿の幣は宮司さんはフリーハンドで切る。切り始めて何年も経っていない娘婿の庄悦さんは口伝で教えられた図柄を独自に設計図におこし、手本にしているという。庄悦さんは震災前、昼間は実家のお菓子屋さんで働き、帰宅後に夜鍋できりこを切っていた。通年は御幣束なども合わせて合計4000枚くらいを作るが、氏子の多



「恵比寿の幣」をひろげる工藤庄悦さんと、右図は宝袋をかたどった「切り透かし」

くが被災した今年は9月から切り始め、1600枚を用意したという。

机の上にあった11月7日付の新聞記事には神職として苦悩する庄悦さんの言葉があった。「地鎮祭もなにもかも無意味だったのかと…。津波に町がのまれたのは自分のせいだと思うことができました。」しかし10月、同じ仮設の住人から子どもの七五三を依頼され、励まされたという。



庄悦さんの奥さま真弓さんが幼い息子、由祐くんの言葉を綴った「五行歌」

記事がきっかけで全国から支援の晴れ着が届き、今年は七人の子どもたちと庄悦さんの4歳の息子の由祐くんが、上山八幡宮で七五三を迎えた。9月には延べ千人ものボランティア達の尽力で瓦礫が取り除かれ、神社の敷地で恒例の御神楽も奉納された。私達が訪れた翌日から1週間は用



“グラウンド・ゼロ”となった志津川の街並みを見下ろす上山八幡宮

意した正月のお飾りやお札の仮設住宅での頒布、その後は初詣…と、年末年始も忙しい毎日が続きそうだ。

「紙のお飾りが揺れたりすると、神様来たって思いますね。今朝も地鎮祭が外であったんですけど、やってる最中に大風吹くときとかあるんですよ。その時は、ああ、来たのかな、って思います」と庄悦さんは小さくうなずいた。

## ✂ 明日の生き方

「志津川は“グラウンド・ゼロ”になったんだから、何もかも全てなくなったあの場所だからこそ作れる新しい町を、私達は目指さないといけないと思う。」

そう力強く語る庄悦さんの妻真弓さんは、手仕事やイベントを通じて仮設の住人たちが集い、気持ちや考えを伝えあう場を作ろうと奔走している。

お父様の祐允さんは言う。「それまで私も含めてみんな、物に囲まれた生活だった。いらぬ物を買って、物を中心に暮らしてね。ところが3月11日3時34分、この街は無くなってね、物ではなくなったんですね。避難所に行って皆さんが支援してくださる姿を見てね、人の心っていうのは、本当に大事だと思いましたね。心のつながりがこんなに大事だって、75歳になるまでこれほど痛切に感じたことはなかった。

他の場所でも「家は残ったが、むしろ物を捨てるようになった。そうして家を失った友人とともにゼロから出発したいと思う」と話す女性に出会った。

「生物誌」(=生命の歴史物語)を標榜するある生物学者が、人間は“生きている”という実感を、自分の時間を生き、他者との関係を感じることで得られる、と言っていたのを思い出す。神職さんの時間が刻まれた真っ白の切り紙細工が人々と、地域の隣人たち、土地や家々の神をつなぎ、一年ごとに更新されて風土や季節と人とを結び付けていく。鎮魂の思いや祝い事の願いがそこに重ねられていく。街並みは消えても、きりことともに人々の生きる希望はあり続け、新しい生き方を探し始めている。

では私はそこから何を学び、どう一緒に明日につながる価値観を生み出していけるだろうか？ 目と耳をすまし、考えることから新年を始めたい。

## ✨ 丹羽朋子 (にわともこ)

中国の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」を運営。本エッセーのバックナンバーは一芯社のサイト (<http://yixinshe-books.jimdo.com/>) に掲載中です。